

「安倍晋太郎氏のカネは森喜朗氏を通じて返した」という田原氏



実際、NHKは2月25日の『ニュースウォッチ9』で、機密費上納などについて詳細に報じている。なぜそうしたスクープが続かないのか。それは記者クラブメディアこそ、長い間、機密費の毒に冒されてきたからにほかならない。

私の手元にはまた、共産党が発掘したとされる機密費の会計記録の一部がある。資料は91年11月から92年12月にかけてのもので、宮沢喜一政権の加藤紘一官房長官時代のものと推測される。

収入欄には「長官より」と記載されており、官邸関係者が官房長官から機密費を受け取り、使用していたことがわかる。支出には具体的な名目が書かれているが、14か月間の支出総額は、1億4386万円。機密費の総額を考えると、ずいぶん

少ないように思えるが、この出納帳に記載されているのは、まとまった現金配付ではなく、パーティや葬式の香典、祝い金や見舞金など、いわば雑費の類である。

このなかに、気になる項目がある。91年12月20日の「番記者忘年会」。支出は36万円に上り、番記者を集めた忘年会に、機密費からの支出があったことを意味する。ほかにも、92年2月4日と同年9月4日に、「記者懇会費」としてそれぞれ9万円、15万円の記載がある。

番記者への機密費接待が常態化していたことは、すでに述べた。現金の受け渡しに発展していく「餌付け」の第一段階である。この資料もまた、そうした癒着関係を裏付けるものだ。呆れるのは、02年4月に共産党の志位和夫委員長がこの資料の存在を国会で明らかにした当時、記者クラブメディアもこの件を報じたものの、自分たちの名前が記載されていたことには一切触れず、完全黙殺を決め込んだことだ。

また、前出の塩川議員は今年3月、小泉政権の安倍晋三官房長官時代の約11か月間(05年11月〜06年9月)に、「会合」目的で計504回もの機密費が支出されたことを明らかにしている。機密費情報開示について市民団体が起こした行政訴訟で、内閣官房が裁判所に提出した資料だ。

角栄から「名刺代わり」に

ところが、この件についても、新聞・テレビはまったく報じていない。あれほど情報公開にうるさい記者クラブメディアだが、機密費についてだけは口を閉ざしている。これでは、使途公開について消極的なのは、マスコミ自身に不都合な情報が隠されているからだと言われなくても仕方あるまい。

一方、堂々とそうした疑問に答えようとする言論人もいる。その筆頭が田原総一朗氏だ。6月3日、現代ビジネス主催のネット生中継「Ustream」で、田原氏は私との対談に応じた。5月28日放送のテレビ朝日系「朝まで生テレビ!」で、私の持ち出した機密費問題について、議論を打ち切ってしまったことへの反省かもしれない。田原氏は政治家からカネを渡された自らの体験を語ってくれた。

最初にカネを渡されたのは田中角栄氏を取材しに目白へ行ったときだったとい

それは、受け取るのが永田町の常識で、突き返したらケンカになるからだという。6月14日放送のテレビ朝日系「ビートたけしのTVタックル」では、三宅久之氏が『週刊ポスト』を手に、記者クラブへの機密費接待について告発した平野貞夫氏に向かつて問うた。

「そういうことをアンタいうんならば、実名を挙げてやったらどうですか。私はねえ、野中さんがねえ、政治評論家にカネをやったっていわれて、非常に迷惑してるんだ」

三宅氏はこう激怒したが、そこは怒るところではない。まさしくいま多くのマスコミ人が、国民の税金を原資とした「政治とカネ」の問題に問われているのだ。とくに政治出身者は疑いを

もたれている。それならば、いっそのこと自ら調査・取材し、その結果を自ら報じたらどうだろうか。それこそ究極の「説明責任」であり、ジャーナリズムの使命にもかかなうというものではないだろうか。

週刊ポスト増刊 マネーポスト 7月号 新エトバブルの波に乗る 上る株厳選セレクト 好評発売中!! 定価550円 税込 小学館